様式第１号（第１０条関係）

2022 年度業務実績報告書

提出日　　2023 年　1 月　　日

１．職名・氏名　教授　亀田 勝見

２．学位　文学博士　、専門分野　中国思想史　、
授与機関　京都大学文学部　、授与年月　1999 年 3 月

３．教育活動

(1)講義・演習・実験・実習
①　中国語 I・II（各 1 単位［週 2 コマ］、毎年開講）　1 年生 ②　内容・ねらい（自由記述） 初修外国語として中国語の入門を身につけさせる。 ③　講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述） 多人数相手ではおろそかになりがちな発音能力の向上と、期末テストまで復習をする意志の低い学生に復習の習慣づけることを目的として、以下工夫を行った。 使用する教科書に対応した Web ページを自作。クリック一つで音声を確かめることのできる教材として、授業時間の内外を問わず利用できるようにしている。 毎年授業を LL 教室で行う。②の教材を授業中必要な時にいつでも利用できる環境を提供。併せて F レックス LMS を活用し、学生との密なる連絡や電子教材の提供の便に供した。 例年、言語の学習だけではなく文化交流的学習も重視しているが、2020 年度以降は新型コロナ蔓延の影響で留学生との文化交流関連や SA 活用は停止中である。 2022 年度はすべて対面授業で実施できたが、いまだコロナ蔓延防止のため積極的な発音練習や対人会話練習はできていない。そのため、語学授業としては甚だ不本意な状況が続いている。
①　導入ゼミ（1 単位、毎年開講）　1 年生 ②　内容・ねらい 教員の専門である東洋の分野を題材として、大学に入学したばかりの一年生に、大学での資料収集・作成や発表などの基本ルールを身につけさせる。 ③　講義・演習・実験・実習運営上の工夫 授業の序盤では、大学に入って間もない学生のために、大学での学習のしくみや心構え、時間割を埋める作業の補助を行う。これと並行して、教員との連絡の取り方や日本語能力などの基礎スキル養成を実施する。その際、グループを作成しグループ間で作業内容の正否を討論させた上で正誤のチェックを行った。 中盤では、日本語スキル向上の継続を中心に、グループワークで不適当な表現や誤った文章作りなどを自己解決していく面を重視して指導を行った。 終盤では、あらかじめ個々の学生に選ばせていたテーマ発表の準備を行わせた。これと並行して、レポートの書き方やプレイステーションの基礎についても、以前と同様グループワークによる解決を中心として指導した。最終発表では、ここまでに指導した内容を踏まえて資料を伴う口頭発表を行わせ、学生からの質疑応答へと進めた。 本来はグループで 1 つのテーマを丁寧に掘り下げ発表させる方針なのだが、いまだ新型コロナの影響下にあるため、当面は個人発表にとどめている。
①　東洋思想（2 単位）　1 年生 ②　内容・ねらい 古代中国の思想展開を、思想史という形で年代順に解説することで、時代ごとの思想継承や変化を理解させる。具体的な内容としては、序盤の数回で中国史・中国思想史の概説を行った後、四つの小テーマを設け、思想史的展開を 3・4 回単位で講義する方針としている。

③　講義・演習・実験・実習運営上の工夫
　理解の助けとして、プレゼンテーションソフトによる画面と書き込み用プリントを配っている。講義に連動したプレゼン画面を見ながらプリントの空欄を埋めたりメモをさせたりして、講義内容への興味を保つよう心掛けている。また、授業の最後にはその日の内容を踏まえて学生個々に意見や感想を書かせる。さらに、小テーマの冒頭ではアンケートを実施し講義を受ける前の知識ないし意識を集計し、それが講義を受ける中でどう変化していくかを明確に意識させる工夫も行っている。
　内容の性質上、文献資料中心の授業となるので、内容に少しでも関連する写真や図、ビデオなど、極力視聴覚に訴える教材をプレゼンテーション画面に組み込むよう努めている。

①　学術ゼミ（前期および後期、各 2 単位、毎年開講）

②　内容・ねらい
　唐以前の漢文古典資料に訓点を施した教材を利用して、訳注を作成することで、漢文読解能力の向上を目指す。同時に、各教材を読み込むことにより、古代中国の歴史・思想・文化を学ぶ。
　2015 年度より海外実地研修を織り込んだ授業を展開していたが、コロナ禍により 2021 年度から 2 年続けて海外実習を中止し、東洋史に関わる書物をテキストとして会読し、そこに漢文資料を交えて紹介し学生間で議論するスタイルにしている。次年度は以前のような形式に戻すことを目指している。

③　講義・演習・実験・実習運営上の工夫
　訳注作成に対する要求レベルは高く設定していない。一方で、授業中に訳案を出席者で討論して結論を導いていくことに重点を置く。

①　比較文化論（2 単位、毎年開講）

②　内容・ねらい
　学術教養センターに属す教員が毎週入れ替わりで登壇し、各々の専門分野に関連する国の文化を紹介する授業。亀田は台湾をテーマにして講義した。

③　講義・演習・実験・実習運営上の工夫
　台湾と日本との交流を基軸として、導入ではネット上の動画を紹介することで台湾への関心を喚起した。引き続き台湾の地理・歴史・社会・文化を語り、最後に再び日台間の交流へ話を戻して講義全体の起承転結を完成させた。また、台湾からの留学生にも出席してもらって話を振ったりすることで内容の現実味を出すことも心掛けた。

①　研究の世界（2 単位、毎年開講）

②　内容・ねらい
　学術教養センターに属す教員が毎週入れ替わりで登壇し、各々の専門分野に関連する内容を紹介する授業。亀田は「“天道は是か否か？”― 運命と向き合う古代中国人」というタイトルで、中国思想史における運命観の展開を平易な形で紹介した。

③　講義・演習・実験・実習運営上の工夫
「東洋思想」と同様、文献解読中心の分野であるため、学生の興味を惹くことに特段の注意を払わねばならず、できるだけ関連するイラストや写真、年表などを利用して視覚的理解が可能となるよう努めた。加えて、講義テーマと関連する内容を含む中国の流行歌 MV を紹介し、その内容分析を課題とし、講義で知った知識と絡めて深く思考してもらえるよう工夫した。

(2)その他の教育活動

LCAP（1 単位）
　中国および台湾の提携校受け入れ先とした、短期語学留学プログラム。事前指導と現地視察を行う（往復の付き添いなどは行わない）。
　通常は夏休みの 9 月上旬から中旬にかけて学生を現地に派遣するが、新型コロナ蔓延に伴う渡航困難な状況が影響し、2020 年度から 3 年連続で現地派遣ができていない。しかし昨年度と同様の代替措置として、年度末の 2023 年 3 月 8 日～22 日の二週間、オンラインで高雄科技大学との中国語交流イベントを実施予定。予定参加者は 5 名。

未実施なので昨年度を例にとる。相手校の学生は日本語を専門とする 3～4 年生で日本語能力が比較的高く、こちらの中国語初級レベルの学生たちは彼らに日本語を交えた会話で助けてもらえるよう、本学の学生一人につき数名の相手校学生という構成でグループを作成した。 教員から提示された複数の課題を、Zoom を通したグループワークでこなし、最終発表では中国語を使って双方の国や地域の文化を紹介しあうことができた。また、中国の流行歌を中国語で歌うことも最終発表で行い、相手校に大変喜ばれた。 今年度実施予定のプログラムも上記内容に準ずる予定である。

４．研究業績

(1)研究業績の公表
① 著書 【 0 本】
② 学術論文（査読あり） 【 0 本】
③ その他論文（査読なし） 【 0 本】
④ 学会発表等 【 0 件】
⑤ その他の公表実績 【 0 本】
(2)科研費等の競争的資金獲得実績
なし。研究を進める上で外部資金まで必要としないため、応募していない。
(3)特許等取得
(4)学会活動等
・日本道教学会理事　2022 年度～ ・『王勃集』読書会（宇佐美文理代表） 訳注作成を主目的としており、一定の範囲を終了させた段階で成果報告を出す予定 年度内に 1 回程度、訳注案作成を担当した。2021 年度から新型コロナ関連で休会中。 ・「道教思想研究会」読書会（金志玹代表） 訳注作成を主目的としており、一定の範囲を終了させた段階で成果報告を出す予定 年度内に 1 回程度、訳注案作成を担当した。オンライン会議で月 1 回開催。

５．地域・社会貢献

・2022 年 10 月 16 日（日）、福井県日独友好親善協会、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館主催の「マルティン・エバーツドイツ総領事講演会」開催を補助。開催場所は大学の交流ホール。テーマは『ドイツの「エネルギーシフト」とロシアによるウクライナへの侵略戦争の影響』。一般の参加者に加えて本学の学生も多数参加。
・本学のサークル「fpu 太極拳サークル」を主催。 サークル顧問であるとともに、学内外の学生・教員・留学生および一般人を広く招き、太極拳を指導。週 2 回の活動を行う。

６．大学運営への参画

(1) 補職
(2)委員会・チーム活動
・教育研究委員
(3)学内行事への参加
(4)その他、自発的活動など
・カリキュラム委員会（部局内活動） ・海外研究WG（部局内活動） ・英語以外の外国語を担当する教員（自分以外は非常勤講師）の取りまとめ役 ・留学生（特に台湾）の相談役 ・「小浜担当教員」（海洋資源学部の両学科新入生について、永平寺キャンパスにおける世話・相談を行う）